八幡宮　本社舞殿　神田高壹石

御崎大明神　大居組ニ在

明地神權現　山組ニ在　神田高貳斗

荒神　小祠七

肥田五兵衛　後太平記　三村譜代郎等竹井宗左衛門直定毛利ニ飜り松山天神の丸

石川源左衛門久式か留主をたはかり出久式か妻子を捕へたり肥田、土屋、土師以下宗

徒の勇士城中ニ掛入所々ニ火を掛働きけり

阿彌陀堂　藝州士休息之處奥田記ニ此村を出す

飯山は川關村ニ有　阿みた堂は上村寶妙寺の傍に有

備中飯山砦は天正の間毛利家所有也番衛士自三本府一取路之次避雨于此堂因題名云

堂在二有漢上村寶妙寺之傍一

空林寂々古堂開、修葺無人久廢頹、昔日題名荒壁上、祇今只有雨聲來、

常山城

城主新山玄蕃助家佳　三村氏麾下後屬毛利氏

陰德記松山城落去條ニ云大松山の者共も反忠して手切の矢を射掛ける間元親も

今は誰をか待へしとて久式相供に新山玄蕃家佳、田中藤兵衛、三村與七郎、梶屋織部、田中又十郎、上田嘉介等を相具して古畑の城戸を切破てやかて火を掛けれは敵不堪天神の丸へ入にけり

三村兵亂記云敵は追〳〵に加わり猿谷、高陣、傾城尾、松岩院、軸林迄雲霞のごとく充滿せらされ共本丸堅固に扣へければ藝州の兵兒玉三郎左衛門尉井上又右衛門ひろかに軍議す此城三口ゆり靜らば軍兵多く損亡すへし其故は元親と枕を並へ死を一時に決せんと相極たる者計殘りたるへし窮鼠還て猫を嚙といへは今此紛れに攻落せとて手を盡すといへ共いよ〳〵異儀なく扣へたり馬酔木は新山玄蕃家佳ふまへ勢籠ヶ壇は田中長門守、同左近丞、阿部市之介、田中藤兵衛、同左京進、芳賀李之介、野口等を始めとして屈强の兵勢貳百計りにて扣たり一旦ニは攻落すへき樣もなし藝州重て術を加へ廿一日早天ニは馬酔木勢籠ヶ壇へまつ矢文を射て其至情を見んにはしかゝ薄箆の矢に計策狀を付て射込は籠城の兵寄集り唯方便寄んに謀事成へし只一所に腹切へしと決定すれ共色をかへ樣をかへ探りければ二十一日酉の剋に弦をはづし甲を脱て城を出しは淺間敷かりし事とも也

埴村　上有漢村　四上村　イニ寺　東守安村　南下村安元　北長代村

高八百八拾壹石三斗八升壹合

廟墓

金藏岩山大明神　社司

本殿　拜殿

境内除地社地山共六畝歩神田引壹斗

四社大明神　社人

本殿　拜殿

境内御除山二ヶ所五反二畝廿四歩神田引

龜田大神　社司

境内御除八歩神田引三斗

龍王　社司

神田引壹斗

大神　社司

境内壹畝

五社大明神　社司

天神

御崎大明神

境内除地

塔寺

高雲寺　眞言宗　長代村臍帶寺末也

本尊觀音

境内御除畑屋敷五畝五歩

川關村　上有淡郷　東西廿七町余　南北三十一町余

高七百貳拾四石七合三勺

飯山城

備中府志ニ此城は源三位頼政か後山縣三郎兵衛國吉住す　一説ニ新山兵庫とも云又下左衛門尉共云天正九年落城のよし

法明寺阿彌陀堂　府志ニ足利尊氏將軍建立の靈場なり天正九年五月毛利の將桂左衛門尉、粟屋備前守をはゝめ百五十七人の姓名を堂の小壁に草書にて書記し今に傳われりと云其記ニ云

備中國上房郡有漢保飯山在番藝州住人毛利輝元内次第不同

桂左衛門太夫
粟屋備前守
坂　兵部丞　中村内藏介　藏田東市介　飯田與一右衛門
羽二勝三郎　粟屋彌三郎　井上源左衛門　小川善兵衛
布施又右衛門　鷲頭因幡守　田中與三兵衛　熊野平右衛門
伊藤又左衛門　小川與五郎　宮原坐之介　藤田坐介
古田左馬介　林　又四郎　兒玉彌五郎　神保雅樂頭
飯田左馬介　杉原次郎右衛門　杉原彌六　宇多田新三郎
勝屋彦三郎　金子　六郎　瀨戸兵庫頭　梶原藏之介
東内藏八　財滿内藏介　神保右京　天野右衛門
財滿平右衛門　宮原平之進　財滿四郎右衛門　石井内藏介
木村織部　池部雅樂頭　杉原民部　三戸玄蕃
河本與兵衛　飯田與五郎　光信源十郎　山東源七郎
白木五郎三又　在馬彌五郎　錦見右衛門　栗栖與三右衛門
宮原彌四郎　嘉屋久兵衛　嘉屋内藏人　嘉屋市之祐

嘉屋惣一郎　三宅又右衛門　作文源右衛門　林　掃部頭
野村源左衛門　寺内八郎五郎　寺内七郎兵衛　熊野彌九郎
野村右門太夫　伊藤坐之介　長　坐之助　長　助左衛門
長谷川右京進　作間源十郎　寺内新五左衛門　庄原嘉右衛門
山縣三太夫　三戸又五郎　野村彦三郎　天野與二郎
天野孫右衛門　財滿又三郎　天野次郎右衛門　寺内二郎右衛門
内飛又左衛門　藤田源二郎　名井助右衛門　天野加賀守
長谷川右衛門佐　小川原縫殿介　伊藤出雲介　林　石見守
井上與一左衛門　内藤右衛門佐　宗傳新右衛門　寺澤淡路守
武行和泉守　天野惣右衛門　白谷又一郎　内藤伊賀守
財滿與左衛門　井尻左京進　作間源兵衛　庄原藤右衛門
林　傳兵衛　三戸仁兵衛　村瀨兵庫頭　林　兵部太輔
武田小右衛門　匹野源正

以上百四人

次ニ被官衆

入山隱岐守　三上太郎左衛門　寺内和泉守　長井次郎右衛門
長嶋内藏介　後藤但馬守　片山傳兵衛之丞　柏村與一右衛門
米原兵庫頭　粟原右衛門　柏村惣左衛門　嘉屋内藏人
入山杢之介　佐久間鹿之介　御手洗新介　三原新右衛門
潟田左馬佐　鹿原彌太郎　新井與三左衛門　荒木六兵衛
伊藤市藏　伊藤伊賀守　安元新三郎　松山彦九郎
山瀨新五右衛門　吉野又左衛門　荒木美濃守　馬場與一右衛門
世良右馬佐　入山四郎左衛門　柏村淡路守　片山伊賀守
井上三郎右衛門　立野助三郎　井尻與五郎　片山雅樂頭
淺野源三郎　遠藤又左衛門　勝谷與介　五嶋美濃守
寺内小三郎　山瀨雅樂頭　世良與市　西村雅樂頭
山縣縫殿介　平野左馬佐　伊藤又左衛門

以上人數四拾七人

右者藝州之住人徒然之餘り如是御座候以上

天正九年巳五月吉日

椿花山林泉寺　眞言宗　長代西福寺末

本尊觀音

境内除畑有之

飯山城

城主山縣三郎兵衛尉國吉　毛利麾下

平川氏著書ニ曰先祖ハ源三位入道頼政の嫡孫美濃三郎國直美濃國山縣郡に住して山縣三郎と号し後安藝國に遷居して毛利氏の幕下に屬し軍功有を以て當城主となる

大系圖によれば源頼光の子頼國其子頼綱其子國直也美濃國山縣郡ニ住ス是に依て美濃三郎共山縣三郎とも國直と稱せし由後に安藝國配流せられし也然共頼政とは一族にて其系は別なり

陰德記小倉合戰の條ニ云山縣三郎兵衛は粟屋與十郎と朋友の契深かりしが敵に押隔られて福山迄引退きける所に傍人いかに山縣よ粟屋か討れたるを知らざるかと告たりけれは扨は與十郎討死しけるにやさしも一所に討死ところ約せしものをとて即時に取て返し小倉の麓へ押寄唯壹人坂中迄攻上り山縣三郎兵衛と云

大剛の者なり思ふ子細有て討死せんと是迄來りたり出合給へと名乘けれは敵是を聞て天晴大剛の者哉我討取て高名にせんと二三十人討て出けるを山縣元より可生と思わぬ故無二無三に蒐入てさん〳〵に戰ひ終にろこにて討れにけり

長代村（上石淵郷）　東西壹里拾八町　南北拾五町

高千三拾貳石五斗六升三合七勺

末次城　府志ニ云城主工藤次郎兵衛尉永祿十一年宇喜田と戰ひて軍功有中國太平記ニ竹ノ庄ニ工藤云々元文の初也

黑瀧山西福寺　眞言宗　京都嵯峨大覺寺末也

本尊如意輪觀音　境内本堂一宇除地畑山林竹藪有之

小室山能生寺（寶）　禪宗　松山賴久寺末也

本尊藥師　境内本堂一宇除畑山林藪有之

天神　本社有境之内山林有之

岩山大明神　本社有境内山林有之

末次城

城主工藤次郎兵衛尉　始屬大内氏後毛利氏麾下太平記ニ有工藤次郎左衛門高景

者元弘中の人蓋此人の祖にして當時在關東

西國太平記云鳴輪ニは三村家親津々には津々加賀守新見ニは楢崎竹庄ニは工藤

唐松ニは伊達石賀ニは石賀與兵衛離小屋ニは大槻高山ニは石川皆都は福井孫六

左衛門なと云者共此外小給人の書上は各家人共也一族多く中能くて懼者も有又

大内方尼子方と權を爭ふ者も有けり

又竹庄合戰條ニ云元就卿中國の勢五万餘騎を催し筑前國へ發向し立花城を攻此

故に中國大半留守なるを知て宇喜多直家備中國を取んとて同十一年の夏人數五

六千遣す竹の庄の工藤より國中へ觸ければ我も〳〵と出向ふ人〳〵には庄、植木、

三村、野山等也一日ニ三度の合戰互に死を輕んして法を重んト喧啄はげし宇喜田

方利を失ひ日も暮けれは引揚ける（中國太平記同）

陰德記松山落城條ニ云竹井宗左衛門直定、河原六郎左衛門直久云々蕪菁少々計臺

ニ盛天神丸に在す法師の許に進すとて門を乞て入ければ守門の者不苦とおもひ

門を開し處に頓て大槻源内、小林又三郎來集て門内に入奥の座敷へ馳行て忽久式

か妻子を捕へたれば續て土居、工藤、田中、蜂屋、肥田、土師、神原等數百人押入所〳〵に

火をろ掛たりける

下村　下有浜郷　東西壹里計り　南北壹里三十一町

高八百五拾五石六斗八升七合

名義上村の處にいへり

廟墓

王子權現　本殿　拜殿　境内山林除地　社人

權現　吉倉

本殿　舞殿　境内山林除地

塔寺

白龍山祥雲寺　禪宗　川面村吉祥寺末

本尊釋迦　畑山林竹藪除地

天臺山水月庵　禪宗　同末

本尊觀音

田土村　竹ノ庄内

高七百貳石五斗壹升九合

藤澤城　府志ニ當城肥田淡路守宗房其先は土肥次郎實平の末也　一説ニ林宮内と云

藤澤山城

肥田淡路守宗房毛利氏麾下

原氏舊記に肥田氏は美濃の大垣より來り上下三十人程來ると云太閤に攻られて落來る近頃迄大身也しよし

陰德記松山城落去條ニ云竹井宗左衛門直定、河原六郎左衛門直久と云牢人年久敷寄寓して有けるか若元親の恩澤を報せは身体を碎く共不可得當之者何然隆景の計策の中に陷溺して一旦の利欲に百年の盟を空ふするころ轉手けれ両人いかにもして石川久式か守りける天神丸を取ばやとおもふ久式に説て吾反心有よし風説の有ころ迷惑なれ此義小松山へ參りて元親に對面の上申開度候と頼みける間久式も其志の程を感し五月十二日井山雄西堂と相共に小松山へ同道して行けるか留主の程諸門の警衛嚴敷下知して出行けるか、れは兼て巧みし事とて兼菁少許臺に盛天神丸に在法師の許へ進上すとて門を乞て入けれは門番不苦とおもひ門を開く所に頓て大槻源内、小林又三郎來りて門内に入奥の座敷へ馳行忽久式か妻子を生捕たれば續て土居、工藤、蜂谷、田中、肥田、土師、神原數百人押入て所〳〵に火をろ掛たりけり

今按に直定直久は諸記に皆元親か譜代の士也とす
陰德記ニ寄寓せる牢人とせるは返り忠せしを助けていへるもの歟

矢野村　多氣郷の内　同名備後國甲奴郡矢野
高千貳百四拾五石八升九合

夫木集　爲家

梓弓はるといふより武士の矢野の松原時を知るらし

つまかくす矢野の山なるかゐの木のつれなき戀に我年は經ぬ　俊頼

松葉集ニ未詳と見へたり同名なればもしやこの矢野にいあらずやとおもふまゝに記しぬ

夫木集に　文永七年毎日一首中　民部爲家

梓弓春といふより引かゐて早去年いはふ矢野の里人

石村　岩村是なり　多氣郷の内　東西六町　南北十二町
高七百貳拾參石參斗壹升四合

大嘗會和歌集ニ云

後冷泉院永承元年十一月十五日主基方備中國　藤原家經

石村

君か代はまさこのなれる石村を山のたか根にあふるへき哉

石村森　名勝考ニ本州なる事物には見へざれ共文保の度の主基方は我國にして又永承の度にも石村の歌見ゆ此國の名所なる事知るへし

井蛙抄に

後醍醐天皇文保二年主基方巳日樂破　隆敎

道ありと木のもとくさの垣穂まて我君か代をいは村の森

瑞泉庵　禪宗濟家　貞村貞德寺末也

本尊藥師　境内畑二畝十二歩有

惣社權現　和泉子（イヅミス）　技中津々有

神田高三斗　本社長床有　祭九月十八日　御料他領十五社之寄合場也　四畝二歩　宮地權現林

荒神社五　同一社　本村竹井村ニ有

吉川村　東西　南北

高千八百六石六斗三升壹合

名義詳ならす

東西　南北

枝村并小名

歳額　田畝

田畝

高

畑畝

高

戸口

家數

人數

畜

牛

馬

溝渠　堰間

池塘　山溪

橋約

廟墓

八幡宮　近邊の大社也　祭禮　月

別當神護寺　神主助左衛門　大祝宜助八　小祝宜九郎兵衛昔ハ社家廿四人亡滅して今十八人神子も減せり

國華万葉記ニも出せり往古石清水より勧請といふ當社にて毎歳正月十五日の夜釜にて粥を焚其中へ管を入其管へ粥の入と入さるとを見て其年の豊凶を知る事當社の神秘なりとゞ昔は税史(ノットホフム)祝部、左行事、祝宜、神子、神人等の官有しが今は亡ひ失て此名なし此八幡宮は由緒有社也けん本朝語園に八幡の樂人元正といふ人音樂に妙を得たる(本朝快談故事を合せ用ユ)當管領備中國吉保川に下向しける(こは吉川保の誤りならん)幾程なくして上洛する時櫃生の泊ニて心神亂れ片髪雪のごとくに變したりき元正奇異におもひ巫女に占しむるに吉備津宮託して曰く適當國に下向すといへども汝か秘曲

を聞さるに依て果りをなせりと元正大に恐れていろぎ御社に參り皇帝以下の秘曲を奏せしかは白髮も元のことく成しとそ

此說古今著聞集本朝快談故事語園等に並ひ出せり往古は城州男山より管領し給ひし物と見へたり

大永元年の頃美濃國出家來り住し時奉加して御宮建立せし由言傳ふ御供所に開山の像有本社の棟木に社僧宗光と書し有應永五年五月日は不見といふ又隨身門棟木に應永十二年五月と有又御供所側に開山と云僧の古碑有文字苔侵して見へがたく社領は文祿元壬辰歲高麗陣爲御祈禱從太閤三百六十石御朱印有之

小堀遠江守愛長中支配して松山に住居有し時此御朱印寫さるへきとて出せしに其儘返されす是より社領斷絕せるよし

按するに由緒なくては御朱印賜わらさりし又沒收もし給ふまゝ然るをいか成は斯故なく返されすといふはいと不審也但戰國を去事遠からす小堀氏かゝる奸謀の質なれね共機に依て斯計らわれしにや

寬永十二年の頃勸喜院と云僧京都へ上り木下宮內少輔利房侯へ歎き訴へ申せしに依て社領荒地の內を以田五反高七石五斗寄附有折紙を賜はりしかいか成事にや

紛失せしかは再ひ淡路守利當侯の時右之高七石五斗寬永廿一年三月折紙幷御宮山林竹木譽書二通神護寺へ賜はりける

備中國加陽郡吉川村當八幡宮爲御寄附荒地之內を以田地五反令扶助畢全可爲社領者也

寬永五年　　木下淡路守利當判
三月八日

吉川村　神護寺

備中加陽郡吉川村當八幡宮境內山林竹木剪取事一切令停止若背此旨者於有之急度曲事可申附者也

寬永廿一年　　木下淡路守利當判
三月八日

吉川村　神護寺

神前左右ニ金佛（左地藏右彌勒）各座像有此側にコマ犬有此二佛汗出る事有世の吉凶を知ると云若甚敗時はコマ犬も共に汗出るとろ神壇扉二枚にて三所並て開く中に金幣貳枚立たり釣燈籠貳ツ磬あり

本社三間ニ五間　棟ニ鬼面の瓦形を悉く木を以て削成す寒國故瓦を不用と見へたり
拜殿二間五間　釣殿　本社の右ニ有一間ニ七間　御供所三間ニ五間　此處に開山像有　隨身門一間半ニ二間
門ニ入右側ニ本地堂有彌陀三尊又隨身を入たり二間四方格子を組　鐘樓堂昔の鐘は破れて
また鑄直す一間四面
末社王子權現方五尺　此前ニ小社並へり稲荷、山神谷三尺四面
寶物　當神廟記　領主木下侯記之
田上直衛云當村枝村八名有其内布郡と云所有延喜式ニ所載古郡社疑らく此地な
らんかと云
八幡宮御旅所刈尾村ニ有之同所阿彌陀堂有
枝村千本の内　阿彌陀堂方一尺　藥師堂同上　荒神方二尺
同布郡の内　阿彌陀堂方八尺　藥師堂上ノ堂一地ニ有　荒神小社也
同西庄田の内　阿彌陀堂四ツ堂　荒神　小社也
同川内田ノ内大日堂　荒神社方二尺　天神方二尺貞享二年改ニハ不見
同藤の田の内　藥師堂方一間　荒神小社
同みちのろ　井上坊　長福寺　寺尾ノこみわ堂

荒神五神　ミッチノ口ニ有　八火荒神と云神二尺四方
龍王社二ヶ所村ノ中二社共ニ方二尺　權現五尺四方正行に有
摩利支天ともに云所ニ有小社也

塔寺

光林山神護寺　八幡宮別當也天台宗　金山遍照院末
境内ニ靈驗ノ彌勒菩薩有變有時は肌ニ汗を出すと云
開山石碑文字苔むして讀かたし疑らくは宗光にや棟札の名應永五年と有本尊あ
みだ立像同藥師黑佛座像昔は此像本尊也住坊三間ニ九間半門長屋作り寺内　荒神方一尺　寺屋
敷　高四斗壹升貳合　山林六反
仙久山金福寺　八幡宮社僧　天台宗　金山遍照院末寺
屋敷高七斗壹升五合　山林壹反
本尊阿彌陀立像　住坊二間ニ十間
廢寺　福仙坊　井上坊　長福坊　千藏坊
以上八幡宮社僧六ヶ寺にて祭禮之時神護寺の次に兵具を帶て神輿に供奉せしと
云然るに右四ヶ寺ハ廢絶して今は金福寺のみ殘りて神護寺の次に勤也

笹野の城　府志ニ當城主ハ土州兵部丞居す備中兵亂記ニも載たり

中嶋記　永祿二年九月備前國沼の城主宇喜田和泉守直家は備中へ働かんと備前虎倉城主伊賀左衛門尉久隆をして竹の庄吉川村中津井村惣して近き村々を犯し掠め亂取苅田なとして傍若無人也けれは備中の境目藤澤に砦を筑きしと云々

竹之庄

和名抄ニ上房郡多喜是なり今は文字の安きに便りて竹の庄と云り日本武尊の御代國〳〵を定められて本州にても賀陽郡竹部なとあり淺口郡にも竹村あり扨此竹村をも御名代の地なるへくは此竹の庄も又同し然るには非さるや

昔澁川氏の領地なりけん康正二年道内裏段錢幷國役引付帳ニ云拾參貫三百拾九文六月廿四日定　澁川右兵衛佐殿　備中國多喜庄と云々

竹の庄ニ雩の穴有口貳間四方深き事限あらず男瀬淵と云此淵を埋る時は大雨降事實に奇特なり寛政元年雨乞に此淵を埋とひとしく大雨にて川筋玉島洪水せしも此時也恐ろ敷事いふ計りなし此大雨より石を以て埋たる穴忽ち元のことく松山より柳村へ行道出口の茶屋より一里計り奥なり

天保十年の夏旱魃所々名山に祈りて雨乞の法秘術を盡し丹誠す此時此淵にも例のことく埋しかとも更に其時には雨降事なし年によりて應不應有事にや予か知らさる事なれば識者に可尋

吉川村百姓仁右衛門孝行の聞へ有に依て五十七歳の時天明五年木下侯より褒美を下し給ふ

備中誌上房郡卷之六

湯山村

高四百廿七石六斗壹升三合

百八拾九石壹斗九合　奥田記四百八拾三石四斗五升

清盛石塔　清水寺ニ有

河合八幡宮　祭禮昔は九月十四日元祿十一年より九月十一日、十二日

社僧勸學院　爾宜作兵衛　神子六兵衛妻

神主田土市太夫　爾宜田土五郎介　神子松太夫妻

本地阿彌陀佛

本社二間ニ三間　釣殿五尺一間　拜殿二間ニ三間　御供所二間ニ三間　隨身門一間ニ二間　鐘樓堂方一間　石鳥井

鐘名不見　明暦三年孟洗吉祥日神原治右衛門幷大工名有

末社齋宮三尺ニ二尺二寸　荒神方二尺　常光荒神一尺

荒神　さけ原　善常坊攝之

社八尺四方

荒神社　若宮方七尺　村中ニ在田土市太夫攝之

權現社　廢寺極樂寺の鎮守也今勸學院攝之

社七尺ニ壹丈　拜殿一間半二間　祭禮九月八日

廢寺極樂寺　今地名のみ殘れり

此寺の鎮守權現社有しを今勸學院支配す

龍角山清水寺　天台宗金山遍照院末也

開基仁安三年　平相國清盛　艸創と云

觀音堂一宇　寺十二坊也　勸學院　井上坊　東坊　西坊　井本坊　禪定坊　善光坊　南坊

上ノ坊　般若坊　杉本坊

此時寺領三百石と云古帖ニ貞享二年六坊有今は勸學院井上坊禪定坊善光坊享保十八年四ケ寺殘りて跡は亂世の時斷絶すと云古帖ニ杉本坊安樂坊今は田地の名となる

觀音堂四方四間　本尊行基作今世迄七百年余開扉をなさすと云今四坊住職の始め一度佛像を拜する事とゞ厨子破風造り割立觀音立像新佛也常燈明有壇上護摩の具有

堂中法華經局を置毎年七月朔日より七日行道戒法を勤行す又普賢像毘沙門古佛有作不知惣して當山の古佛はいつれも殊勝也

平相國清盛石塔堂の右側に在五輪也　二王門八尺一丈五尺　金剛力士長七尺計古佛也

清水寺緣起曰敬白勸進沙門修造備中國上房郡龍角山清水寺本堂抑當山者比叡山之末流仁安三年大檀那平相國清盛公草創也彼本尊大慈大悲觀世音菩薩出大唐天台王泉寺而鎮坐於此地以來運歩人隆除三毒難正和五年國主再造焉倡盤若坊法師又應永十八年安藝守沙彌掃部助修理之又天文十三年備前國小倉城主伊賀左衛門尉久隆公傾首疆前因茲爲治國利民再建之又慶安四年辛卯蒙於領主木下淡州太守利當公命而神原治左衛門尉久益爲國家安全再興畢本願佛敎院自示以來日月來中略大利不可有疑者乎仍而勸進之趣如斯

皆延寶八庚申歲素秋日

清水寺

勸學院

勸覺院　屋敷高壹石四斗壹合　山林一町三反六畝

本尊阿彌陀座像惠心作　不動行基作

住坊三間ニ十間　長屋一間半六間

禪定坊　寺屋敷高壹斗八升貳合　山林六反三畝

本尊地藏座像　住坊二間半九間　長屋一間半貳間

井上坊　寺地高　壹斗七升三合

本尊阿彌陀座像　住坊二間半八間　長屋門一間半六間

善光坊　寺地高壹斗九升五合

本尊阿彌陀立像　住坊二間ニ七間　長屋

廢寺　安樂坊　寺地高壹斗壹升七合

井上坊　西ノ坊　今畑と成

同　杉本坊　寺地高貳斗六升

善光坊の北の方にて畑と成

上ノ坊の趾も勸學院の後の地にて畑の名と成る

右六ヶ寺屋敷高貳石三斗貳合諸役共延寶元年より領主木下淡路守利貞侯ゟ免除之

圓福庵　貞享ノ記ニ云　天台宗勸學院末　寺地高八升七合

本尊觀音立像　神原治右衛門看經所也此人の木像あり人の丈ニ同し享保年中ニは鐘樓も有銘治右衛門實名を彫付たり

舞地

高百八拾八石五斗貳升四合　奥田記百三拾五石八斗九合

大和佐山城　舞地、北村、寶納三ヶ村ノ山也　府志に曰城主土肥頼秀天正の兵亂に松山天神丸にて力戰す

嘉永年中實平當國守護たりし時より相續すと云

大和佐大明神　森岡氏記

今は舞地村ニ有之

阿彌堂ヵ壱尺　勸學院攝之

大和大明神　享保記ニは大和山大明神と有社僧湯山勸學院有納大村寺淨戒寺神主宮本拙吉

相傳へて云冠之太夫と云者造立ニて元明天皇の御時卯九月十八日迂宮之由其節はしやりてんとうしめんうしい田番めひしや田などいへる御供田多く有し由申傳ふ又大永元年九月十八日大和山より原の地へ社を舞おろしぬ此譯讃岐の内攝飽渡海の船大和山大明神御見渡し船とも多く損しぬと云依て攝飽より材木諸入用等調參り原に社を建立す舞おろすと云より此地を舞地と名付ける由云傳へぬ

其時の材木とて今に古木の殘れる有とて今に云貞享二年十二月の事なり大和山は今の宮の後なる高山也里人奇怪を唱ふ享保記ニ云大永の頃大和山に宮有て今の地に巫覡舞下すと云依之舞地と云よし舞おろすといふ詞いとおかし

本社 一間半 二間 三方欄干付 釣殿 一間半 拜殿 二間ニ 三間 末社 荒神 二尺五寸方 又社名不知 貳尺方

側ニ石墳 四ツ有 龍祠と云 旱天雨を祈ると云

荒神社 四ツ有

尼神社 方三尺 神人作右衛門攝之

大和佐山城 城主土肥頼秀 毛利麾下

今按に平川親忠著書ニは頼母とす何れか正しきや分ち難し毛利氏の麾下にして諸軍記に土肥と有は此人なるへし古傳に土肥の實平か後の人也と傳へたり

黑土村 竹ノ庄ノ内

高七百八拾八石三合七勺

土生山城 府志ニ云城主神原宮内天正年中高名記備中軍功記ニ神原六郎右衛門尉松山ニ籠城し三村紀伊守と鶏足山の麓ニて戰ひ終に討死す又尼子氏此國に入し時は疋田右衛門元久此城を守る元久は尼子義久近習の士なり

櫻坂城 府志ニ城主下左衛門尉政勝と云

土生山城 原氏舊記ニ此城なし

城主疋田右衛門元久雲州尼子之麾下蓋父十郎左衛門者見于陰徳記天文元年隱岐國合戰條元久者同廿一年始見于陰徳記至元龜中紀年序當然也歟

陰徳記天文元年隱岐國合戰條有疋田十郎左衛門は又永祿十二年尼子勝久入雲州條有右近は記元久上蓋皆右近族不詳其或父或兄

隱徳記備後國泉合戰條ニ云尼子紀伊守國久嫡子式部太輔誠久二男左衛門太夫敬久を大將として云々疋田右衛門尉已下五千餘騎晴久の本陣に五十餘町先遠て萩ノ瀬表へ打出是天文二十一年之役也

又白鹿城後詰條云白鹿城既ニ難儀ニ及由注進頻りなりしかは云々龜井能登守云々七千余騎先陣たり態と引分て後陣ニ打立近習の士ニは立原備前守云々疋田右衛門尉、遠藤甚九郎以下三千余餘騎都合壹万餘騎にて同永祿六年九月廿三日白潟の加羅〳〵橋を打渡り白鹿表へ打出ぬ扨龜井以下七千余騎五段ニ備へ先陣に進みたれは二陣の近習三千余騎は一隊に成て先陣負なば入替らんと勇氣を厲まし胃の星を輝し弓鉄砲を騁て待かけたり

其時の材木とて今に古木の殘れる有とて今に云貞享二年十二月の事なり大和山は今の宮の後なる高山也里人奇怪を唱ふ享保記ニ云大永の頃大和山に宮有て今の地に巫覡舞下すと云依之舞地と云よし舞おろすといふ詞いとおかし

本社 一間半 二間 三方欄干付 釣殿 一間半 拜殿 二間ニ三間 末社 荒神 二尺五寸方 又社名不知 貳尺方

側ニ石塡 四ッ有 龍祠と云 旱天雨を祈ると云

荒神社 四ッ有

尼神社 方三尺 神人作右衛門攝之

大和佐山城 城主土肥頼秀 毛利麾下

今按に平川親忠著書ニは頼母とす何れか正しきや分ち難し毛利氏の麾下にして諸軍記に土肥と有は此人なるへし古傳に土肥の實平か後の人也と傳へたり

黒土村 竹ノ庄ノ内

高七百八拾八石三合七勺

土生山城 府志ニ云城主神原宮内天正年中高名記備中軍功記ニ神原六郎右衛門尉松山ニ籠城し三村紀伊守と鷄足山の麓ニて戰ひ終に討死す又尼子氏此國に入し時は疋田右衛門元久此城を守る元久は尼子義久近習の士なり

櫻坂城 府志ニ城主下左衛門尉政勝と云

土生山城 原氏舊記ニ此城なし

城主疋田右衛門元久雲州尼子之麾下蓋父十郎左衛門者見于陰德記天文元年隱岐國合戰條元久者同廿一年始見于陰德記至元龜中紀年序當然也歟

陰德記天文元年隱岐國合戰條有疋田十郎左衛門は又永祿十二年尼子勝久入雲州條有右近は記元久上蓋皆右近族不詳其或父或兄

隱德記備後國泉合戰條ニ云尼子紀伊守國久嫡子式部太輔誠久二男左衛門太夫敬久を大將として云々疋田右衛門尉已下五千餘騎晴久の本陣に五十餘町先遠て萩ノ瀬表へ打出是天文二十一年之役也

又白鹿城後詰條云白鹿城既ニ難儀ニ及由注進類りなりしかは云々龜井能登守云々七千余騎先陣たり態と引分て後陣ニ打立近習の士ニは立原備前守云々疋田右衛門尉遠藤甚九郎以下三千余餘騎都合壹万餘騎にて同永祿六年九月廿三日白潟の加羅〳〵橋を打渡り白鹿表へ打出ぬ扨龜井以下七千余騎五段ニ備へ先陣に進みたれは二陣の近習三千余騎は一隊に成て先陣負なば人替らんと勇氣を厲まし胃の星を輝し弓鉄砲を聯て待かけたり

又義久兄弟藝州下向條ニ云此度義久朝臣の前途を見屆可申ため安藝國へ可下と望ける兵共は立原源太兵衛久綱、山中鹿之介幸盛と云々疋田右衛門尉、同甚九郎云々等六十九人也然れ共一人も許し給はす後〳〵跡を慕ふて杵築迄引取りけれは彼所に於て櫻應腸はり夫より悉く追拂ひ給ひけり

又尼子勝久入雲州條云先年尼子義久毛利元就の爲に降旛を樹られし時山中鹿之介を始諸士悉く國中を追出され漂流淚落の身と成しかは皆京師に登りて親みを尋ね緣を求て尺蠖の屈に身心を苦しめ一度は雄飛の時を迎へんとす云々爰に先年新宮黨の人々爲時久ニ生害せられ給ひし時尼子式部太夫の三男二歳なりしを乳母懷中に抱きて遁れ出ぬ云々東福寺に在すを云々東福寺の僧侶に訴へて還俗させ申尼子孫四郎勝久と号稱しける云々永祿十二年六月廿三日出雲國島根郡忠山に取上り勝久國入也舊功の志あらんものは早く味方に馳加るへし先歸復許復歸則んと喚て夜半に鬨の聲を作る事三ケ度也是を聞て國中に殘り止りし兵共は大庭の社の大宮司秋上三郎左衛門綱平其子伊織介久家二百餘騎ニて一番ニ馳付たり森脇市正久仍、横道源助高光、疋田左近同右衛門尉云々已下究竟の兵七百餘騎ニて相加わる城主神原宮内

六郎左衛門尉屬三村氏天正三年戰死于松山

三村兵亂記云松山勢廣瀨の陣屋へ馳出て藝州安國寺の僧侶模首座其外數輩打果しけれは藝州の大將大ニ驚き此時雌雄を決せすは所々蜂起眼前たるへし去來や彼陣屋を打破らんと三月十六日阿部川へ打望み玉ノ渡り四條、原、梁場三口へ興を一度ニさつと相渡し所々に火を放ちけれは廣瀨の陣屋保つへきにあらす軍士松山を目さし退きける松山方は究竟の兵共を坂の麓へ百騎計り馳下し初の程は遠矢少々射けるか双方次第に押寄鑓屈にて相戰ふ其間に八幡の上ニ陣取ける藝州の兵を見掛松山よりは高陣の後を忍ひ出近〳〵と押よれとも藝州陣は夢ニも知らす頼久寺上ハ寄向ふ所に後より鉄砲貳百挺計り不意ニ放ちけれは敵陣肝を消し右往左往ニ混亂し四方にさつと引松山よりは勝に乘て追ちらし追ちくりて鷄足山の麓迄攻寄鋒よりも火散をちらして戰ひける間三村親成か勢を始め諸卒等打負て戰死す松山勢ニは神原六郎左衛門其外士卒數多討死す

陰德記ニ隆景成羽に入て休息し給ふ所に廣瀨の固屋に在ける國人共松山へ志を通し安國寺か弟子模首座を始め藝州より籠置たる軍兵共を多く打果しけるに依て同十六日諸勢雞足山へ取上り所々に火を放ちけれは固屋の者共叶わす皆明退

て松山へ入ニけり此時松山より固屋を助んとて打出て相戰ひけるに三村親成手の者多く討れぬ又城兵に神原六郎左衛門をはしめ數十人討死してけり

附り陰德記松山落去條云吉良常陸介、神原七郎左衛門蘆雪と云盲人と三人計り本丸へ入たりけるを勃草は疾風に顯るとは是なりと人皆感しけり

三村兵亂記ニ云本丸へ弓を引中にも吉良常陸介神原與三左衛門妻子從類引具して本丸へ入次ニ芦雪と云盲目の禪門是も同本丸へ入にけり

今按に與三左衛門は七郎左衛門を誤りたるなるへし扨此人は六郎左衛門の弟なるらんか宮内といふも其父或は兄弟の内ならん元龜中迄は疋田右衛門此城主たれば是も當時の人なるへし

櫻坂城　原氏舊記ニ　源範頼の末津々加賀守城主と有

城主下左衛門尉政勝　始北條氏麾下後歸正于官軍建武年間の人

平川親忠著書云建武二年霜月自山門後醍醐天皇花山院に還幸の皇居を警固して有けるか芳野に潛幸有けれは重禍を取行すれは面目なしとて國に馳下りて宮方にろ屬しける太平記末書に此事を載たり

上津　東西廿町　南北三町　東宝納境堂山　四八川境堂屋敷山　南野山西村境鳥帽子岩　北肥田村ノ内大神宮

高千三百三拾四石六升五合

小名　眞京寺　俵原　大村寺　猿目　田中

大八幡宮　本村田中日向ニ有　本地阿彌陀佛

本社　舞殿　鳥井有　祭八月廿八日　上野村、有納村氏神也

稲荷大明神　本村宗久ニ有　本社舞殿有

天神宮　本社　舞殿　阿彌陀堂有て上津村之内肥田竹井本村貞村之内岩目谷の氏神也

大歳大明神　小祠

野地大明神　同

王子權現　同二矢ほき　肥田

山ノ神　ひちの木

天神宮　小屋

荒神　板屋　辻堂　荒神はな　はなた　のり

相頭天神宮　枝郷ノ内田中に有

本社　舞殿　隨神門　鐘楼　祭禮九月五日

庚申堂　あさろに有　除地二十一歩七間ニ三間ニ

藥師堂　深田寺

あかふり　同

あみだ堂　下　正力　同　同　同

地藏堂　けさかけ

因果物語ニ云竹ノ庄といふ村の庄屋の女房山伏を隱し男にもち山伏死して後幽靈と成て彼女に出逢ふ事數年也夫怪み終に見出し女房を恥しめけれは其儘氣違ひて怖敷狂ひけるを牢舍させ置くに次第に形變し髮筋針金のとくに成り眼光り口ハ耳迄切れ即ち角出て蛇身と成其所に大なる池有に此池に入へし是に入に鐘太鼓ニてはやし送るへし無左は此郷中殘さす祟りをなし土地あらん限取殺し池と成すべし好のことくせば障るへからすといふ土地の者殊の外畏怖して急々池に送るへしと談合して正保二年酉六月廿八日に送りける由備中笠岡東雲寺の江湖に有し僧佐和山大雲寺の春甫の雜談也海德寺の住持嶺的六月廿七日ニ東雲寺ニ來り明廿八日ニは彼女を池ニ送り入山ニて我等あたりの郷中の者見物に行也同敷は此寺の僧迄も末世の物語に行て見給へといひけれ共九里の路なれは行事不叶と儲に語

られけるか果して廿八日に大雨降事一時計は躁しかりしとなり是も一奇事なり

有納　竹ノ庄ノ内　東西廿町　南北壱里　東四　貞村境目原　上津村ノ内　原　西村之内二本木　北　貞村ノ内かちけ

高八百六石七斗四升七合九勺

小名　肥田　水廻　大村　サルメ　カハメ

功德山大村寺　天台宗　江州敵山延暦寺末

本堂茅葺　二王門　鐘樓堂　外ニ堂二宇有

天平中聖武帝依勅願行基菩薩開基法相宗中興開山賓相上人より天台宗と成

本尊藥師　行基　本堂五間四面

除地畑五反壹畝廿四歩　屋敷壹反貳畝歩　田方九畝歩

寺中

且度坊　高四拾石五斗四合一勺

谷ノ坊　寺内三畝拾歩　畑壹畝拾歩　但寺地計

淨海坊　高貳拾石三斗六升三合

精進坊　高廿三石九斗九升九合

安忍坊　高七石貳斗一升三勺

般若坊　寺内三畝歩　畑貳拾八歩　但寺地計

蓮花寺　是は禪宗　高八石六斗一升八合九勺

右寺々の持高此のごとし

右淨海坊に不思議の事ころありけれ延享元年の事かとや此寺の邊りに大塚作兵衛といふ者の妻出産してけるか或夜産所に怪敷音したりしが作兵衛火を照し是を見るに赤子の行方知れす成ける故大ニ驚き色〳〵捜し索むれども更に其術なかりけり爰に淨海坊に舊くより飼置ける猫あり其處の者共此猫の所爲ならんと但〳〵に申けるに予作兵衛は我か子を取られて意恨やる方なく人々の云に任せていろき淨海坊へ行猫を與へ給わん事を乞ふ住僧此よしを聞て里人のいふ處其理りなきにしもあらねども扨は猫の所爲なりといふ其證しもなればいよ〳〵此寺の猫か取殺したりと定め難し然るを數年手なけれ飼養せしものを畜生とはいひながら筋なくして人手に渡し命を取れんは不便の至りなりいか様ニも御證しを尋得て來り給へかしと作兵衛に相斷り酒などすゝめて居けるに作兵衛酒を呑まどろむともなく夢ともなく此猫いひける様は赤子を取しは我にあらず當寺佛壇の下に住居する數年を經し大鼠也我も兼てより此鼠を採得んと思へども中〳〵

ニ及びがたし年を空敷せり此たびの仇を復せんとの事ニはべれは大西の猫を借得給はゞ彼とふたりして彼鼠にかゝらんニはやわか仕損しまゝ〳〵覺へ候へば彼を殺して君の仇を報ひかつは以後の御心をも休め奉らんと正敷いふかと思へば作兵衛眠り覺たり不思義の事に思ひさるにても大西といふ家にさる猫有やと尋見に是も淨海坊の猫に劣らぬ年經たる逸物也扨は我子を取たるは彼にはあらずとて佛壇の下に年久敷隱れ住し古鼠也けるとや始て彼猫がまぼろせに告しを感し頓て大西の猫を借得て淨海坊につれ行しか彼の寺の猫に逢せけるに恰も舊友のごとく馴むつひ其夜に至りけるに床の下おびたゝしき音して鼠と喰合さま聞へけるか終に彼大鼠を嚙殺し作兵衛か恨を晴しかつ後の災を斷たりけるは誠に未曾有の珍事也と聞人感し恐れける

此事先年小寺先生に聞しが未た委しからす其後松山へ至りしにろこの金子某なる家に甚介とて七十餘の老人勤居けるか此人有納村の産にていまだ稚き時其親の物語りせしを聞しとてことし天保十年まで指を折て算ふれば九十八年のむかし語りなりと目に見るごとく語り聞せぬ

戒會山蓮花寺　禪臨濟宗　竹ノ庄貞村貞德寺末

平川親忠書書ニ云天正の兵亂に毛利家の幕下ニ屬して度〳〵力戰し終に討死す
三村兵亂記云數度の合戰ニ云々寄手の軍兵ニは家近十郎、河津、原尾、梶屋、難波、大槻
數多討死す是は近里の者なれは往々に記せり其外備藝防長の兵こゝかしこにて
果せし事勝て計ふへからず

源内信繁　信通の族父子兄弟未詳　毛利氏麾下

西國太平記ニ云宍戸備前守を大將ニて軍勢を催ふし同國の人々へも廻文を遣し
備前守備中へ發向せば一時に出向わるへしと云爰に離小屋の城主大槻源内信繁
と云者心の早き勇士成か觸狀を見るより用意せしと云々
今按に此信繁を後太平記三村兵亂記ニは竹井直定か被官とし陰德記ニは直定
か郎等とせり是ニ依て考るに今も有納村ニ竹井肥後守正高の宅地と云傳たる
所有と也舊說に正高は川上郡黑忠村の城主竹井掃部左衛門尉廣高とて元弘中
に北條仲時に殉死せし人の末といへり然れは正高は廣高か庶流なるか爰に來
り住めるか扨直定は正高か族ニて信通信繁は世々竹井氏の被官也し故直定か
奸謀に從ひつるにはあらずや

後太平記ニ松山城沒落條ニ云三村譜代の郎等竹井宗左衛門尉直定と云者有其志

寺地　八畝歩　畑六畝十二歩

大村山　有納村の枝村にて大村といふ處に有

大嵜會和歌集ニ云

後一條院長和五年十一月主基方備中國風俗　　善滋爲政

大むら山

君か代はねさしとゞむるとみ艸の大村山に見ゆるたのしき

離小屋城　府志ニ竹井宗左衛門直定被官大月七郎左衛門尉信通居城す　中國太平
記　離小屋に大槻天文の頃也

竹井肥後守正高宅跡正高か祖は川上郡黑忠小笹丸城主竹井掃部左衛門廣高元弘
中北條毛利に屬して戰功を顯す　仲時に隨ひ江州番場に於て殉死す

荒神　小祠

山王　小祠

龍王　小祠

稻荷大明神　小祠

離小屋城　城主大槻七郎左衛門尉信通　毛利氏麾下

易變者なれはとて間諜を入られけれは忽ち飜て松山天神ノ丸の守禦石川源左衛門久式小松山ニ行たる留守を伺ひ五月廿日朝僕從に野菜を持せ天神丸へゞ送りけるか陣門の者ども武器とは知らず扉を開て入けるが竹井か被官大槻源内、小林又三郎透間なく走り入久式か妻子を捕へたり　此文前にも出たり

西國太平記ニ云庄爲資備中國一万貫の地を領す離小屋ニ大月高山に石川此外小給人の嶮上は右の家人ともなり一族多く中能て懼者も有又大内方、尼子方と權をあらろふ者もありけり

一四反六畝十七歩　藥師山堂有之

一畑三畝十四歩　藥師除地

一寺地は除地

山三町三反　且度坊

除地畝壹反五畝十六歩

内壹反壹畝屋敷

四畝十六歩　畠

一山四反四畝　淨海坊

除地畑二反壹畝廿二歩

内一反七畝歩　屋しき

四畝廿歩　畠

一山壹反五畝歩　安忍坊

除地畑六畝十八歩

内四畝歩　屋しき

二畝十八歩　畠

一禪宗　蓮花寺

除地畑一反四畝廿歩　當時なし

内八畝八歩　屋しき

六畝十二歩　畠

一山壹畝廿歩　谷ノ坊　當時なし

畑四畝二十歩内三畝十歩屋敷　山一畝廿歩　一畝十歩　畠

一畑四畝歩　般若坊

内三畝廿歩　屋敷　廿八歩　畠

右大村寺内

鎮守堂 二間ニ三間　山王七社ノ内早尾

十王堂仝

辨才天　小社　荒神　小社

鷲大明神　小社　稲荷　小社

鐘楼堂 九尺四方

竹井竹ノ庄　東西十町　南北十五町

高千貳拾七石六斗貳升五合四勺

竹井次郎左衛門墓　畠類も此村に有といへり竹井氏もと此地の産なるへし

先年は竹井岩村一村にて竹井は本村岩村は枝郷の由記錄に見へたり其時の村高

千二十七石六斗貳升五合四勺

内　四百六十七石六斗五升八勺　本村

五百五十九石九斗七升四合六勺　岩村

貞村竹ノ庄　東西拾七町　南北壹里壹町　東黒土村山峯切　西有納村一本切　南寶納村峯切　北岩村矢野村境

高千貳百八拾壹石貳斗五升五合六勺

竹ノ庄に　守安源藏墓有　何れの時なるやしはらく爰ニ記す

長岡山貞徳寺　禪臨濟宗　近江愛知郡高野村永源寺末也

本尊聖觀音　除地御除の外高三拾四石五斗六升余

中八幡宮　枝郷中津ニ有　本社　舞殿　鳥井有

神田高五石四斗七升余　内三斗は領主代々免除五石壹斗七升余は氏子共より寄

進高也　祭禮六月十四日九月十七日

正田大明神　小祠

小森大明神　小祠

荒神　小祠三つ　肥田　正田　奥田

岩目山岩泉寺　禪宗濟家　貞徳寺末

本尊聖觀音　境内ニ有

赤星本尊聖觀音　堂有之

如意輪觀音　堂有之

助蔵本尊聖觀音　堂有之

右之外御撿地帳ニ載敷地并山林御除

小社　大小十六ヶ所
小堂　大小二十ヶ所
室納竹ノ庄　東西廿八町　南北廿七町
高千百五拾壹石壹斗壹升三合
三百六拾四石壹斗壹升壹合
矢藏畦城（今矢倉山と云高山なり）
府志ニ當城は一說ニ竹井治郎左衛門と云また田中藤九郎盛兼と云天正年中中村掃部介直重、同官兵衛直久相續て居住す當國毛利に屬してより難波傳兵衛尉親俊此城を守ると云
無畏山慈眼寺　天台宗　有納村　大村寺末也
本尊觀音　堂（二間ニ三間半）（三間ニ三間）の堂有
高三石四斗六升余
屋敷は四畝廿歩　畑六畝歩　山八畝十歩　各除地
矢倉大明神　本社　拜殿　宮（三間ニ三間）　祭禮九月七日
外ニ小宮二ッ有　山五反御除地

寺尾荒神（小祠廿歩）　同荒神（廿四歩）
嶋の神　右之外御除地帳ニ御載有之敷地山林除地
今村八幡宮　枝郷黑土ニ有　本社拜殿鳥井有
矢倉山畦城
竹井次郎左衛門　竹井村ニ有書類有之と云墓有寶納村ニ並べり
城主田中藤九郎盛兼建武中両朝麾下
武家評林ニ云赤松が勢の中より兵士四人進み出て數千騎扣へたり敵の中へ無是非打て掛りける近付ニ隨ひ是を見れば長七尺計りなる男の髮は両方に生分て皆逆に裂たるか鏑の上に鎧を重ねて着大立舉の臑當に膝鎧掛て龍頭の冑を猪頸に着成し五尺余の太刀を帶て八尺余の鉄かなざい棒の八角なるを手元貳尺計を九めて誠に輕けに引提たり數千騎扣へたる六波羅勢彼の四人か有樣を見て未戰ざるに三方へ引退く敵を招て彼等四人大音聲を揚て名乘けるは備中國住人頓宮又三郎入道子息孫三郎、田中藤九郎盛兼、同舍弟彌九郎盛泰と云者也我等父子兄弟少年の昔より勅勘武敵の身と成し間山賊を業として一生を樂めり然るに今幸ひに此亂出來て忝くも萬乘の君の御方に參る然るを前度の合戰さしたる軍もせで味

方の負たりし事我等か恥と存る間今日に於てはたとへ御方負て引とも引まし敵強くとも夫にもよるまじと敵中を破て通り六波羅殿に直に對面申さんと存る也と廣言吐て仁王立にぞ立たりける島津安藝前司是を聞て子息二人手の者共に向ふて言けるは日頃聞及ひし西國一の大力とは是なり是等を討ん事大勢にては叶ふまし御邊達は只々外に扣へて自餘の敵に向ふへし我等父子三人相近付て進つ是惱したらんになをか是を討ざらん縱命力乏弱くとも身に矢の立ぬ事有べからすたとへ走る事早くとも馬にはよも追つかし他年稽古の犬追もの今日の用に不立ばいつをか可期いで〳〵不思議の一軍して人に見せんと云まゝに只三騎扱れて四人の敵に相近付田中藤九郎是を見て其名いまだ知らね共猛くともおもへる志かな同しくは御邊を生捕て御方になし軍させんと欺き笑ふて件の金棒を打ふつて靜〳〵と歩み寄嶋津もしづ〳〵と歩ませよつて矢頃に成ければ先安藝前司三人張二十二束三伏引堅めて丁と放つ其矢あやまたず田中か右の脇さきを胴の菱縫の板へかけて箙中まて射通したりける間急所の痛手に弱りてさしもの大力なれ共目暗てさらに進み得ず舍弟彌九郎走り寄其矢を拔て打捨君の御敵は六波羅也兄の敵は御邊也餘すまじといふ儘に兄か金棒追取振てかゝりけれは順

宮父子各五尺貳寸の大太刀を引ろばめて小躍りして續ひたり嶋津素より物なれたる馬上の達者矢襠早の手きゝなれば少しも騒かず田中進んて掛れは間の鞭を打て押もとりにはたと射る田中妻手へ廻れは弓手を越て丁と射る西國名譽の打者と北國無奴の馬上の達者追つ返しつ撼ちがひ人交りもせず戰ひけるは前代未聞の見物也去程に島津か矢種も盡たり打物に成らんとしけるを見て斯ては叶わじとや思ひけん朱雀の地藏堂より北に扣へたる小早川二百騎にて叫て掛りける中に田中か後ろ成勢はつゝと引退ければ田中兄弟頓宮父子四人鎧の透間内胴に各矢二三十筋射立られて太刀を逆につき皆〳〵立すくみてゐ死したりける見る人聞く人惜まぬはなかりける

彌九郎盛泰　盛兼か弟也　傳前に見ゆ

掃部介直重　永祿天正中の人屬細川氏黨三村氏

備中兵亂記三村石川逆心條ニ云田中掃部介百餘騎其外鄕民を相從へ矢倉畦の城を相守る

後太平記泉州久米田合戰條ニ云永祿三年二月下旬云々三好筑前守義賢云々和泉國堺浦に陣を取云々斯る所に畠山紀伊守高政云々田中掃部介云々互に入亂て攻

93
357

戰ふ云々岳山の先陣和泉國住人白井備後守、田中掃部介、神保、神崎、田邊一足も不退勇氣に奉り六千余騎の備への中を虎のごとく蒐通り裏へ切て拔縱横に揉立しかば三好が兵戰ひ負て被討者若干數を知らず義賢暫し戰ふと云とも一場の及に掛て空敗討負北身も共に討れにけり

中國太平記又後太平記ニ云上原、杉原、有地、梨羽以下の備後勢は多氣庄、矢倉畦の城に押寄る城の本人田中掃部介直重、同官兵衛尉直久大敵を見ても少しも氣を屈せず精兵の手だれを揃へて射さす寄手は是を事ともせず塀際迄攻寄て塀に熊手を打かけ〳〵既に乘入らんと捫立る城兵等爰を破られては叶わじと鉾長刀をもつて突落し切落しす寄手少し漂ふ所を又城兵等さん〳〵に射かくれは寄手今は攻あくみ陣〳〵を取て攻へしと虎口を甘ろげ陣を取係る處に城中に反忠の者出來たりしかば田中城を持てたゆる事叶わすして是も又降を乞城を開てゞ落行ける備中兵亂記ニ云多氣庄矢藏畦ニ籠りたる田中掃部介も要害を明去り松山へ逃込ける云々

官兵衛尉直久　直重弟俗見上　當時田中長門同右近、同藤兵衛若松山役ニ有功蓋此族

明治卅六年四月十五日印刷
明治卅六年四月二十日發行
（非賣品）

岡山縣

印刷者　岡山市大字船頭町卅七番地　安井宇吉

印刷所　岡山市大字西中山下百五十四番地　山陽活版所

93
257

3
257

025949-005-0

93-257

備中誌

岡山県

5冊

M35-37

ADC-3528